

のは、見方によって、意見が異なる。あるいはまた、東北タイや南タイの共産主義ゲリラの動きを、ひじょうに大きくとりあつかっているが、はたして、実態がそうかどうか、問題となる。とにかく、稀にみるほど Controversial な書物である。

この Controversial なことの原因としては、あまりにもアメリカの援助計画担当者的な視点が強いこと、これと関連して、ともすればバンコクにおける見方にかたより、村落段階が軽視されてきたこと、あるいはマクロ的考察が勝ちすぎて、ミクロ的観察が軽視されていることなどがあげられよう。その敘述のなかには、まったく鋭い分析だと思われる点もあれば、あまりに幼稚だと感じないわけにゆかない点もある。

なお本書は、Prager Special Studies in International Economics and Development の 1 冊である。こうした実地経験にもとづく低開発国経済研究がつつぎ出版されることを期待する。(本岡 武)

九州大学比較教育文化研究施設『東南及び南アジアにおける人間形成の総合的比較研究』第 2 集、1966. 98 p.

従来ヨーロッパ中心に道德教育の比較研究を遂行してきた本施設は、新たに研究の対象を東南アジアに向け、タイ国、インドにおける人間形成のリアルな姿を追求して世に問うたのが第 1 集であった。第 1 集においては、宗教がタイ人やインド人の人間形成にいかにか大きな役割を果たしているかを改めて深く認識させられたのであるが、第 2 集においてはタイ国における小学校、中学校の教科書を取り上げ、学校教育の場における人間形成の直接資料を提供している。ここに収められたのは中学 3 年の仏教教科書と小学 5・6・7 年用および中学 3 年用の社会科の教科書である。小学校では社会科は<国民の義務>となっており、中学校では社会科は<道德>となっている。難解なタイ国語から直接翻訳された貴重な研究資料であり、その分析の結果は後に刊行される予定とのことで、その刊行が待たれる。国語教科書もつづいて刊行される予定のようである。

仏教の教科書では仏陀の生涯、三宝五戒、五正善、仏陀の教えなどが主な教材となっており、むずかしい仏教の教説がかんでふくめるように解説されてある。

各章末には<問題>と<まとめ>とが用意され、教材が生徒に徹底的に習得されるように配慮されている。タイ国では仏教は国民の日常生活に深く浸透し、その精神生活の安定に役立っている。学校生活は合掌と「仏法僧に帰依します」という誓唱から始まる。教室の正面には仏像が安置され、毎週 1 回以上宗教の時間がある。この宗教の教えによって国民の道德生活も保たれており、宗教の外に道德はないのである。宗教と教育とを分離しているわが国では想像できない世界である。中学 3 年の社会科<道德>の教科書を見ても、仏教の教科書と内容において大きなちがいはない。ただ章末に<むずかしい言葉>と<質問>とが用意され、理解と整理に役立たせるよう配慮されている。親切な教科書という感じがする。

社会科<国民の義務>を見てみよう。歴史と地理という教科が別にあるので、社会科の内容はいわば公民科的なものになっている。教材は各学年 5 章から成る大単元主義である。「ぼくらの学校」というような手近な問題から「税金の徴収とその用途」というような大切だが縁遠くなりやすい問題にまでわたっている。その説明はきわめて懇切丁寧で、やや教訓的であるが、教師に絶対的な権威を持たせているのが目につく。その点わが国の社会科に見られたような「はいまわる自由主義」的な傾向は見られず、むしろ迫力を感じず。各章末には<まとめ>、<実践実行>、<問題>が用意され、道德教育としても行きとどいた配慮の中に力強さを感じず。道德教育においてタイ国は決して後進国とはいえないのではないか。(高木太郎)

Kramol Tongdhammachart. *American Policy in Southeast Asia 1945-1960, with Special Reference to Thailand, Burma and Indochina*. Bangkok: Faculty of Political Science, Chulalongkorn University, 1965. v+449 p.

チューラーロンコーン大学政治学部には、カモンという名前の若い学者が 2 人おり、2 人ともよく切れ、2 人とも政治史を得意とするが、これは、そのうちの国際政治をやるほうのカモンが、アメリカ留学中に、ヴァージニア大学に提出した学位論文である。チューラー大政治学部の Textbook Division から、学生の教科